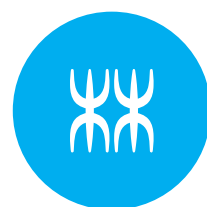


No

05

2020年9月



HIRAKU
TSUSHIN

教授用資料

——知が啓く。——
啓林館

<http://www.shinko-keirin.co.jp>

※本冊子は上記ホームページでもご覧いただけます。

- 編集・発行
啓林館東京本部 電話 (03) 3814-5183 (直通)
- デザイン・印刷
株式会社セブンブルックス・小川印刷株式会社

本 社 〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号
東京支社 〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号
北海道支社 〒060-0062 札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階
東海支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階
広島支社 〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階

電話 (06) 6779-1531
電話 (03) 3814-2151
電話 (011) 271-2022
電話 (052) 231-0125
電話 (082) 261-7246
電話 (092) 725-6677

No

啓く通信

HIRAKU TSUSHIN

No

05

2020年9月



巻頭

学校の働き方改革にむけて

教職員の多忙(感)を生む「負の連鎖」をどう断ち切るか

細島 昌大 一大阪成蹊短期大学幼児教育学科教授

ピックアップ



「AIドリル×宿題管理ツール」で2時間の業務削減も。
ICTで先生がもっと生徒と向き合う時間を持てるように。

新興出版社啓林館

CONTENTS

01 巻頭特集

《 学校の働き方改革 》

学校の働き方改革にむけて
-教職員の多忙(感)を生む「負の連鎖」をどう断ち切るか-
細田昌大(大阪成蹊短期大学幼児教育学科 教授)

06 ピックアップ・ソリューション

《 Libry 特集 》

「AIDリル×宿題管理ツール」で2時間の業務削減も。
ICTで先生がもっと生徒と向き合う時間を持てるように。
小林佑季子(株式会社Libry 営業部)

08 授業力をみがく

《 数 学 編 》 数学は物語

-ストーリーのある授業を創るために-
松本文利(埼玉県教育局県立学校部県立学校人事課 主任専門員)

《 理 科 編 》 コロナ禍における中学校での観察・実験

-一人1実験のすすめ-
佐々木弘記(中国学園大学 大学院 子ども学研究科 教授)

《 英 語 編 》 会話は続くよ!どこまでも

-Small Talkの大きな魅力-
竹崎優子(高知市立義務教育学校土佐山学舎・校長)

14 ICT教育報告

クラウド前提の学校

井上勝(元 八千代松陰中学校・高等学校 副校長)

16 学校を訪ねて

個の成長を信じて

-信州に開校したイエナプラン校-
学校法人茂来学園大日向小学校(校長・桑原昌之)

18 地域の窓

環境首都北九州市のSDGs モデルタウン門司区を目指して

-故郷を愛する気持ち、身近なSDGs活動から始めよう-
熊沢真嗣(門司港 かふえギャラリー源氏屋 代表)

20 編集だより

本づくりの現場から

-文研出版「シリーズ」のご紹介-



学校の働き方改革にむけて

～教職員の多忙(感)を生む「負の連鎖」をどう断ち切るか～

PROFILE

細畠 昌大 ほそはた まさひろ (大阪成蹊短期大学幼児教育学科教授)

1959年、兵庫県生まれ。兵庫県公立小学校教諭、兵庫県立教育研修所指導主事、県教育委員会事務局指導主事、教職員課第二係長、阪神教育事務所副所長、宝塚教育振興室長を経て、公立小学校長として勤務。元兵庫県国語連盟理事。元兵庫県学校図書館協議会理事、近著「学校にゆとりを生み出す副校長・教頭の多忙にならない仕事術」(共著、教育開発研究所)。2018年度より現職、兵庫教育大学教職大学院学校経営コースにおいて「学校危機管理の理論と事例演習」講座の非常勤講師。



1 教員の働き方改革という 言葉との出会い

教員の「働き方改革」という言葉が、これほどまでにクローズアップされ始めたのは、いつ頃からでしょうか。私は、国(文部科学省)による2006年の「勤務実態調査」がその始まりだったと記憶しています。その年に私は県教育委員会事務局教職員課の係長として勤務しており、この調査の担当者として県内の小中学校教員の勤務時間の実態調査を行いました。教員の多忙化がデータとして初めて示されたのです。2000年以降、家庭の教育力の低下などが話題となり、学校教育現場にもその対応が求められました。教員がそれらの解決・対応に追われながらも熱心に取り組み、学校運営等が円滑に進められた一方で、教員の多忙化が進んだという声は、教育行政の現場にも届いてきました。調査は教員の残業時間の数値のみを報告するものでしたが、残業時間があまりにも多いことに驚いたことを覚えています。

また、2013年に実施されたOECDの「国際教員指導環境調査(TALIS)」の結果は、国際比較の文脈にお

いても日本の教員が多忙であると指摘し、教員の勤務時間の多さが全国的な課題となり、「学校における働き方改革」は重要課題となりました。2017年6月には中教審にこの件が諮問され、2019年1月には「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」が公表されました。勤務時間管理の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方の促進、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、学校の組織運営体制の在り方、教師の勤務の在り方を踏まえた勤務時間制度の改革、学校における働き方改革の実現に向けた環境整備、学校における働き方改革の確実な実施のための仕組みの確立とフォローアップ等、今後の方向性が提示されたのです。

2 私の「働き方」に対する意識の芽生え

私は、昭和50年代半ばに、生まれ育った町の小学校に初任教員として赴任しました。当時は、PTA、子ども会、町内会の祭りの会議などが、夕刻に行われることが当たり前で、インターネットもなく、ワープロが初めて

世に出てきた頃でした。私は、若さに任せて勤務時間など一向に気にせず、いつまでも学校に居残って、明日の課題、宿題の点検、学級通信作成など、その時々思いついた仕事をしていました。「すべては子どものために」という担任としての強い思いからでした。そのような働き方をしていた私でありましたが、勤務して3年目、初めて6年生を担当した年に、働き方に対する意識が大きく変わるきっかけがありました。分掌上、多くの会議に参加していましたが、中でも、6年生担任が絡むことが多いPTAの会議には必ず出席をしていました。5月の連休明けのPTAの会議でのことです。私は、先述のように業務を行い、開始時間直前に会場に滑り込みました。会議も無事終わり、さあ帰ろうと思った瞬間です。とても親しくしてくださっていた保護者から声をかけられました。そして「先生は、熱心に子どもたちの面倒を見てくれている。子どもも自分のことをよくわかってくれる先生だと言っている。しかし、会議時間に遅れないようにするために、我々が職場でどのような段取りをしてきたか分かっているか。会議の内容は学校からの依頼が多い。小さくても我々のような会社経営者からすると、お願いする側が時間ぎりぎりに会議室に入ることは考えられない。人は信用が第一と違うのか。信用を得るためには、いろいろな段取りをすることが大事なんだ。若い時からそんな働き方をしていたら、いくら熱心だといっても人は信用してくれない。」と伝えられました。苦情ではなく、若い私への励ましの言葉でした。それまで当たり前だと思っていた仕事への取り組み方が大きく変わり、この「段取り力を備えること」を働き方の信条として過ごすようになりました。

3 「働き方改革」への 校長としての取り組み

さて、2013年に、私は約19年間在籍した教育行政を離れ、市町立学校長として学校現場に戻りました。そ

こで、教育行政での教員の勤務時間の適正化に向けた取り組みと市町立学校現場での取り組みの差を目にすることになりました。当時、教員の勤務時間の適正化は管理職にとっても喫緊の課題であり、教育委員会、校長会も勤務時間の適正化に向けた取り組みを本格的に始めていました。私が参加した多くの校長会研修会でも、勤務時間の適正化に向けた業務改善への取り組みは重要な研修項目でした。

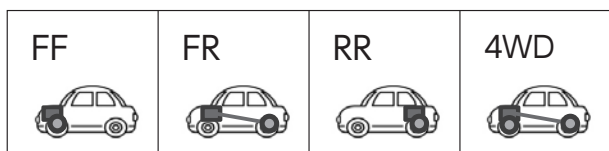
研修内容は、会議のルール化による会議時間の効率化、ICTを活用した事務量の削減及び教職員間の情報の共有化に向けた取り組み事例紹介でした。しかし、校長間協議では、「学校規模、地域性、教員組織など同一環境下での教育現場は存在しないことから、活用事例を参考とした自校独自の解決方法を探るしかない。」という意見が多く聞かれました。校長のリーダーシップによる取り組みが進まない背景には、自校の課題を分析し、解決策を模索しなくてはならないということがありましたが、それは、勤務時間の適正化とは程遠い現実でした。

(1)校長としての実践

私は、勤務時間の適正化に向け、職場への声掛け、スケジュール管理に力を注ぎましたが、一向に改善の兆しが見えなかったため、先生方の退勤時間を遅くしている要因に注目しました。すると生徒指導上の課題や学級内で起きるトラブルの対応に多くの時間を割いている現状が浮かびあがりました。また、その原因の一つとして、先生方の丁寧な学級指導や熱心な教科等指導にも関わらず、「子どもたちの聞く力」に課題があることが分かりました。そこで、私は教員としてこれまで培ってきた指導技術を駆使して、子どもたちの聞く力を育てることで、先生方の負担が軽減されるのではないかと考えました。具体的には、①児童(生活)朝会や担任不在時の授業など、子どもに「直接指導」を行う方法と、②教員、保護者を介した子どもに「間接指導」

を行う方法です。

この校長による「直接指導」、「間接指導」の考え方は、車のエンジン（誰が実践のアイデアを出すか）と駆動方式（誰が中心となって実践するか）のタイプ分けで例えることができます。車は、エンジンの位置と駆動方式によってFF、FR、RR、4WDの4タイプに分けることができます。図1に示します。



（図1）車のエンジンと駆動方式のタイプ分け

「直接指導」は、駆動方式で例えるとFF式の実践であり、「間接指導」は校長がエンジン部分を担い、実践者は各教員（保護者）であるFR式の実践です。また、経験豊富な教員の大量退職に伴い、どの学校でも新任教員、臨時的任用教員が配置される現状では、校長が状況に応じて、時にはFF式も含めた学級経営への関与・教科指導を行う4WD式での指導が必要だと考えます。管理職はできるだけトラブルのない学校運営を行いつつ、RR式（教員が考え、実践する）に任せるだけでなく、課題解決に向け実現可能なFF、FR、4WDの手段を用いて実践することが求められるのではないのでしょうか。

私は、校長が「直接指導」することに重要な意味があると考えています。今も昔も、教員の専門性が問われており、校長として自信をもって「専門性がある」と答えられるか、であると思っています。そこで、学校経営の基



（第60回夏季国語教育研修大会実践教室にて撮影）

盤に国語力の向上を据え、毎週月曜日の児童朝会において、直接全校生の聞く力を育てることにしました。幸いにも兵庫県国語連盟主催の第60回夏季国語教育研修大会実践教室の授業を任され、3年間育てた、子どもたちの聞く力を試す場が与えられました。大きな会場の舞台の上で緊張感もあった中でも、子どもたちは私の発問の一語一語を聞き漏らしませんでした。

学校生活においては生徒指導上のトラブルが激減し、学級担任が対応に追われることはなくなりました。また、養護教諭からは保健室に来る子どもたちの数が減り、日本スポーツ振興センターへの災害共済給付の申請も大幅に減少したという嬉しい報告を聞くことができました。さらに、教員からの子どもたちへの伝達がスムーズになり、学級経営が円滑に進むようになったとも聞きました。このように、校長による「直接指導」と「間接指導」の結果、教員が多くの時間を割いてきた指導上の課題が解消し、超過勤務時間が減るとともに、教材研究等に取り組む時間も生まれ、教員の資質向上にもつながりました。

（2）校長会組織での実践

①校長への聞き取り調査

校長4年目に、教育事務所管内3市の小中学校長会の研修部長となりました。3年前には各教育委員会によるICTの積極的な環境整備（教員1人1台のPC設置、校内サーバ（ネットワーク化）、電子掲示板の活用など）を完了しており、学校現場における勤務時間の適正化全般についても、管理職、教職員が取り組まなくてはならない喫緊の課題として意識化が進んでいました。各校長は文部科学省や県・市教育委員会からの通知、通達を遵守し、校長会としても独自に研修会を実施してきました。しかしながら、それら取り組みの成果は表れていませんでした。2018年のOECD国際教員指導環境調査（TALIS）の第3回調査の結果をみても、日本の教員の長時間勤務は国際的にも際立ったまま、2013年調

査からの改善はみられていませんでした。おそらく私が勤務する地域と同様の状況が、全国各地においても展開されているのであろうと思いました。

そこで、研修部長として、働き方改革が進まない理由やその障害となっている課題を探り、解決策を考えるため、聞き取り調査を3市で行うこととしました。個人的には、教育行政に携わっていた時、勤務時間の適正化は労働安全衛生法にも抵触する課題であり、個々人の業務に対する認識の甘さ、現場管理者（校長）による管理の不十分さ、学校設置者による指導・監督の杜撰さを放置することは、教員や学校に対する社会の信用・信頼を低下させるリスクがあると感じていたことも、調査を実施する後押しとなりました。

調査項目は、勤務時間の適正化の取り組みである「ノー残業デー（定時退勤日）」「ノー会議デー」「ノー部活デー」の実施状況と達成度であり、「どのように実施しているか」「なぜ達成できないのか」を各校長から聞き取り、阻害要因を分析することです。

聞き取りからは、ノー残業デーが達成できない理由として、小・中学校の校種の違いや学校規模等に関係なく、共通した課題の存在も明らかになりました。

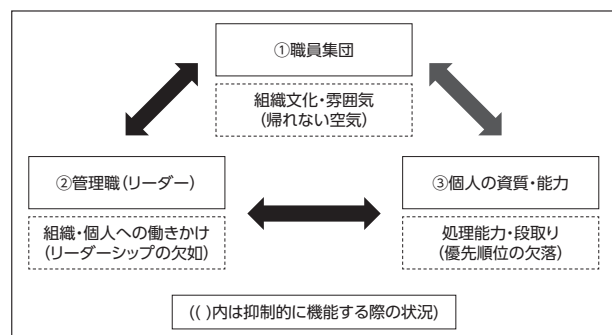
②調査から見てきたもの

校長の発言内容を分類すると、ノー残業デー実施を阻害する要因は「校務分掌の偏り」「初任者や若手（勤務5年未満）教員の課題」「一部教員の意識・技術」「突発的な生徒指導案件への対応」「部活動指導」に整理できました。また、その背後には「教職員個々の資質や能力の問題」「管理職（リーダー）の働きかけや取り組みの問題」「職員集団の慣習や固定観念の問題」が影響していることも分かりました。「教職員個々の資質や能力の問題」については、段取りや優先順位を決定する判断力の未熟さ、生徒指導や保護者対応、部活動指導に関するノウハウの不足、特に初任者や若手（勤務5年未満）の教材研究や事務処理などの非効率性が課題になっていました。「管理職（リーダー）の働きかけや取り組みの問題」については、非効率的な仕事の進め方に対する指導助言の不足、会議の進め方や校務分掌の偏り、行事の精選等に向けた働きかけの不十分さが課題になっていました。そして「職員集団の慣習や固定観念の問題」については、遅くまで学校にいる教員が熱心な教員だと評価されるという思い込みや、学年集団を単位とする文化、行き過ぎた横並び意識などが指摘されていました。

さらに、校長が業務改善の環境整備や取り組みをいくら進めようとしても、個々の職員の資質・能力形成や職場の固定観念改善に向けた働きかけが伴わなければ、それぞれの取り組みは「早く帰りましょう」という声かけ程度に終わってしまい、効果のない、対症療法的な取り組みに終始してしまうことになる実態も分かりました。

そして、この調査により勤務時間の適正化を阻む「負の連鎖」を構成するキーワードを見いだすこともできました。一つは、「無限定・無定量な仕事（の認識）」です。個々の教員が所定の業務を終わらせても、個別の生徒指導や保護者対応等が勤務時間終了後に発生する状況や、部活動への教員の積極的な関わりを求められるような環境では、無定量な仕事認識が構成されていました。

また、漠然と勤務時間内には仕事を終わらせられないと思込む状況が「効率化に対するあきらめの感情」を生み、仕事の進め方を改めないように作用していました。さらにこうしたあきらめの感覚は、業務改善に向け



(図2) 勤務時間適正化に関連する三つの要素

た発想を遠ざけるため、様々な業務を従来通りの（非効率な）方法で進めることを当然視させていました。

そして、こうした考え方を組織に定着させるキーワードが「みんなで」という行き過ぎた仲間意識でした。学校における同僚性が仕事の「横並び意識」となってしまう、周囲に合わせてなんとなく居残るという雰囲気を作られていました。特に小学校においては、学年団等のリーダー次第では、様々な業務を「横並び」で進める組織文化が発現しやすく、個々の工夫改善や管理職による指導や支援の効果を阻害する方向に機能していました。

この結果から、学校経営の実践においては、もちろん絶対的な業務量の多さについては教育行政等と連動した改善を進めつつも、こうしたキーワード間の「負の連鎖」のうち、どこかの部分を切り離すことで、勤務時間の適正化が進み、個々の教員についても資質向上が進むと考えました。各校長がそれぞれの学校における諸条件（教職員の経験年数、年齢構成、資質・能力等々）を見極め、それぞれに応じた指導・助言・支援を模索することこそが重要と言えそうです。

さらに言えば、学校レベルでのさまざまな改善を支持する教育行政も重要です。教育委員会が学校運営を支え、保護者の苦情等に対しても盾になってくれることで改善が進めやすくなるという意見もあり、教育委員会による学校支援を考えるうえでも示唆的でした。

4 おわりに

10年近くにわたる教員の多忙（感）の解消に向けた勤務時間の適正化の取り組みは、厳然として課題が山積しています。学校文化しか知らない中で働いてきた現在の管理職には意識改革はもちろんのこと、今や学校組織や個々の教員の「仕事のやり方」に踏み込むような介入が求められています。2000年以降、地方分権とあわせて学校の自主的・自律的経営が求められ、管理

者や経営者としての校長像が強調されてきましたが、本調査における整理からは、再び教育者や実践者としての校長像が求められている点も指摘できそうです。私は、教員にとっての基幹的業務である教科指導、生徒指導などの指導力が管理職としてのリーダーシップを支えると考えています。

今年度に入り新型コロナウイルス感染症対応のため、ネット配信による授業が実施されるなど、教員の新たな働き方の課題も今後考えなくてはなりません。先述の「負の連鎖」を断ち切り、働き方改革を進めるためには、教育委員会事務局と各校管理職のリーダーとしての力量及びそれぞれの働き方改革の取り組みを、改めて問い、評価することをしなければならないのではないのでしょうか。

引用・参考文献

- ・国立大学法人東京大学(2006)「教員勤務実態調査」『平成18年度文部科学省委託調査「教員勤務実態調査(小・中学校)」報告書』
- ・文部科学省(2017)『学校における働き方改革に係る緊急提言』
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/s.onota/_icsFiles/afieldfile/2017/09/04/1395249_1.pdf
(平成30年1月15日取得)
- ・文部科学省(2019)『新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)』
- ・兵庫県教職員の勤務時間適正化取組評価検討会(2013)『教職員の勤務時間適正化「新対策プラン」(さらなる取組推進のための具体的方策)』
- ・兵庫県教育委員会(2017a)『教職員の勤務時間適正化推進プラン(児童生徒と向き合う時間の確保と、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて)』
- ・株式会社リベルタス・コンサルティング(2018)『平成29年度文部科学省委託研究「公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究」調査研究報告書』
- ・国立教育政策研究所(2019)『教員環境の国際比較 (OECD国際教員指導環境調査(TALIS) 2018年調査結果報告書)』ぎょうせい
- ・兵庫教育大学, 学校教育学, 研究第32巻全240P「ノー残業デー」の完全実施に向けた校長の取り組み—多忙(感)を生む「負の連鎖」をどう断ち切るか—(共著)細島昌大・川上泰彦

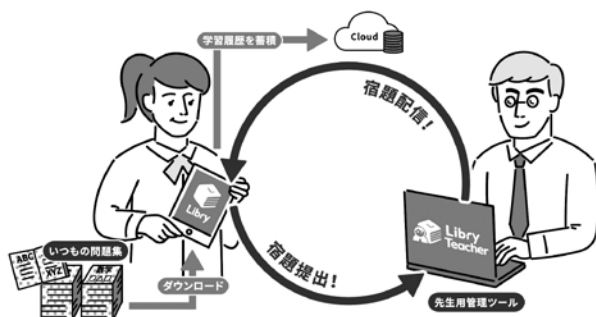


「AIドリル×宿題管理ツール」で2時間の業務削減も。
ICTで先生がもっと生徒と向き合う時間を持てるように。

リブリーとは

ICT（デジタル）とこれまでの勉強方法（アナログ）の理想的な融合を目指して考え抜かれたデジタル問題集です。紙のノートとペンを使った従来の勉強方法の優れた部分を残しながら、ICTのフル活用により「問題の検索」「苦手分野の分析」などを可能にし、生徒がより効率的に学習できるようサポートします。

紙とICTのいいとこ取りで、いつもの問題集がパワーアップ！



PROFILE

小林 佑季子

こばやし ゆきこ

(株式会社Libry 営業部)



埼玉県生まれ。大学卒業後、埼玉県公立中学校で8年間、社会科教員として教育現場に立つ。その後一般企業で企画営業職を経験。教師はもっと生徒と向き合える時間を持てるように単純作業はICTで効率化すべきと考えて株式会社Libryに入社。

啓林館中学教科書は
リブリーに
対応しています！



詳しくはこちら！

1 夢中で駆け抜けた教員時代

中学校の国語科教員だった父を見て、「先生」とは人の成長に携わる魅力的な仕事だと感じ、私も中学校の社会科教員になりました。

一番大切にしたのは、生徒や保護者との信頼関係を築くことです。教員時代、生徒からは「先生はちゃんと話を聞いてくれて、いつもみんなを気にかけてくれる」という意見を多くもらい、自分の心がけが生徒に伝わっていたと感じて嬉しかったです。全力で教員を8年間務め、当時の生徒から、私と同じ社会科教員を目指す子も出てきました。



教員時代の1日は、朝練のあった学校では、7時半ぐらいに学校に行き、朝の部活指導から始まりました。8時半頃に職員室で5分程度の打ち合わせをし、その後は学級に行って、朝の会を実施し、以降は授業が続きます。授業が終わったら、放課後の部活指導をします。生徒が下校した後、18時過ぎにようやく自分の事務作業に入り20時まで学校にいました。土日は部活動の練習や試合があり、丸1日休みというのは1カ月のうち何日もありませんでした。また、長期休みは研修やセミナーを受けていたため、自分の時間はあまり持てませんでした。

さらに、担任しているクラスの生徒が課題を抱えたときなどの生徒指導、毎時間生徒が自分で考える機会を持たせるなどの工夫を取り入れた授業準備でも多くの時間と労力を費やしました。

2 教員時代に抱いた課題意識

教師という職業は、生徒の成長が目に見える魅力的な仕事です。頑張れば頑張った分だけ子供たちが応えてくれるというやりがいがある一方、先生には宿題ノートのチェック、表計算ソフトでの成績管理、各種の校務分掌や生徒の生活記録の作成など、事務作業で多くの負担がかかります。

時間的に余裕がないうえに、生徒や保護者との信頼関係が崩れてしまい、その心理的な負担も加わって実際に休職や退職してしまった先生もいらっしゃいました。自分のこうした経験を踏まえて、私は「単純作業や事務はICTで効率化し、先生がもっと生徒と向き合える時間を持てれば」と少しずつ考えるようになりました。

教員を8年続けたところで、管理職や教育委員会などのキャリアも視野に入るようになりました。ずっと教職に就くか、民間企業で様々な経験を積み、その後ICTを活かして先生の負担軽減に貢献できるEdTech業界に転職をするかで迷った結果、新しいことへのチャレンジを選び、教員から転職しました。

3 ICTで働き方改革を

EdTechの会社のなかでLibry(リブリー)を選んだ理由は、最も「先生のかゆいところに手が届くサービスだ」と思ったからです。リブリーは、いつも使っている教科書や問題集をデジタル化し、AIドリル機能で学習をサポートします。生徒の目線からは、学習履歴に基づいて一人ひとりに合った問題を提案してくれて効率的に勉強ができる、重たいカバンが軽くなるなどのメリットがあります。

教員目線で見たいリブリーは学校現場に馴染みやすく、使いやすいサービスです。いつもの教科書や問題集をそのままデジタル化しているので、指導内容を変えることなく導入することができ、教員の働き方改革に

大きく貢献できるサービスだと自信をもってお勧めできます。

授業では、デジタル教材として電子黒板に紙面を投影することで板書の手間が省けます。また、演習としてリブリーで課題を配信して生徒に取り組みせれば、早く終わった生徒には類似問題機能でより高みを目指す指導ができるため、先生は学習の苦手な生徒へ多くの時間を割くことができます。

さらに、教員向け管理ツール「Libry for Teacher」を使うと、生徒の学習状況の確認や宿題管理を簡単に行えます。「宿題管理機能を使い始めてから、1日3時間かかっていたノートの点検が15分で完了するようになった」という声もいただきました。データに基づいて、授業準備を効率的に行えるようになった事例もあります。



The screenshot displays the 'Libry for Teacher' interface. At the top, there's a header with the Libry logo and a note. Below it, a table shows performance metrics for a specific student or group. The table has columns for '問題プレビュー' (Problem Preview), 'ノートを見る' (View Notes), '回答率' (Answer Rate), '正答率' (Correct Answer Rate), and a grid of scores for questions 1 through 6. Below this, there's a '選択してスタンプ' (Select and Stamp) button. At the bottom, another table lists students (e.g., サンプル生徒1, サンプル生徒2, サンプル生徒3) with columns for '完了報告' (Completion Report), 'スタンプ' (Stamp), '回答率' (Answer Rate), '正答率' (Correct Answer Rate), and a grid of scores for questions 1 through 6.

	1	2	3	4	5	6
問題プレビュー	●	●	●	●	●	●
ノートを見る	●	●	●	●	●	●
回答率	91%	94%	88%	78%	75%	56%
正答率	31%	67%	54%	32%	50%	33%

生徒名	完了報告 (すべて)	スタンプ (すべて)	回答率 (すべて)	正答率	一覧	確認	1	2	3	4	5	6
サンプル生徒1	あり	●	100%	50%	●	×	×	△	○	△	○	○
サンプル生徒2	あり	●	100%	83%	●	○	○	○	○	○	○	×
サンプル生徒3	あり	●	100%	17%	●	×	×	×	×	×	×	×

実際、学校に足を運び、先生方にリブリーの説明をすると、「これが欲しかったんだよ」という声を多くいただきます。「Libry for Teacher」で生徒ごと、問題ごとに解答率と正答率が自動集計されて一目で分かることや、長期休暇中の課題もふくめて生徒の取り組み状況をリアルタイムで先生が把握できるところが好評です。

単純作業はICTに任せて、先生が生徒のために効率的に時間が使えれば、先生も余裕を持って生き生きと働けるようになります。ICTによる恩恵を受けるのは先生だけではなく、最終的にすべて生徒に還元されます。ぜひ先生方には生徒のための時間を多く持っていただくため、学校現場に寄り添ったICTを活用していただければと思います。

授業力を
みがく

数学編

数学は物語

～ストーリーのある授業を創るために～

PROFILE

松本 文利 まつもと ふみとし（埼玉県教育局県立学校部県立学校人事課 主任専門員）

埼玉大学工学部電気工学科卒業、埼玉大学大学院教育学専攻課程修了、熊谷市公立中学校教諭、熊谷市教育委員会指導主事、埼玉県北部教育事務所指導主事・主任管理主事・副所長、県教育局小中学校人事課管理主幹、埼玉県立総合教育センター総合企画長、熊谷市立奈良中学校校長、熊谷市立富士見中学校校長、埼玉県中学校長会会長等。



1 物語とは

数学の授業とは生徒一人一人が筋道を通して自ら考え、友達と議論し、協働して物語を創り上げていく活動です。その際教師の役割とは物語を創り上げるための適切な場面設定と課題解決のための手立てを用意することです。

学習したことをもとに新しい関係を見つけたり、学習したことを様々な場面で活用したりすることで、学習内容を断片的ではなく、一つの物語として捉えることができ、数学の持つしくみや楽しさに気づくことができます。具体例をもとに説明します。

2 「同じとみる」

（中1「比例・反比例」）

「1冊80円のノートをX冊買ったときの代金はY円」

「分速80mで歩く人がX分間で歩く道のりをYm」

「底辺が80mm、高さがXmmの平行四辺形の面積をYmm²」

どれもYをXの式で表すと $Y=80X$ です。

生徒は「代金＝単価×個数」、「道のり＝速さ×時間」、「平行四辺形の面積＝底辺×高さ」を別々の場面で学習

しています。しかし、比例の学習の際にもう一度扱うことで、どれも比例関係であることに気づきます。

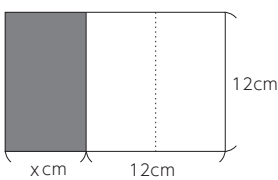
また、「道のり＝速さ×時間」の関係で速さを定数と考えると道のりは時間に比例することになり、道のりを定数と考えると速さと時間は反比例することになります。一次関数で水槽に水を入れる場面（中2「一次関数とグラフ」）を考えます。空の状態から水槽に水を入れるのが比例で、水が入った状態の水槽に水を入れるのが一次関数です。このように生徒に比例から反比例への学習を、比例から一次関数への学習を一つの物語として捉えさせます。

また、物語を創り上げるためには、生徒に課題を設定させたり、条件がえを行い問題のしくみに気づかせたりする活動も有効です。

3 「課題設定」

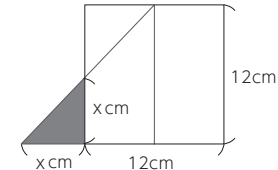
生徒が興味・関心が持て、その中に数学的な価値のある場面を用意し、生徒に課題を設定させることは、生徒一人一人が筋道を通して自ら考え、友達と議論し、協働して物語を創り上げるために有効な手段です。

一辺が12cmの正方形の封筒に同じ大きさの紙が入っています。紙を引き出す長さに伴って変わる量について調べてみよう。(オープンな提示)



①引き出した長方形の面積
 $y = 12x$ (比例)
 ②全体の横の長さ
 $y = x + 12$ (一次関数)

封筒に入った紙が直角二等辺三角形だったら



③引き出された三角形の面積
 $y = 1/2 x^2$

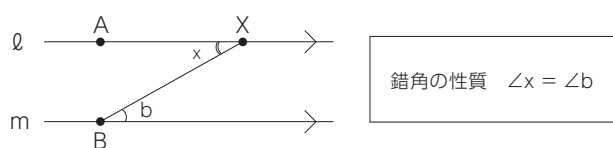
3年で関数 $y=ax^2$ の学習終了後に扱うことにより比例、一次関数、関数 $y=ax^2$ を一つの物語として捉えることができます。

4 「条件がえ」

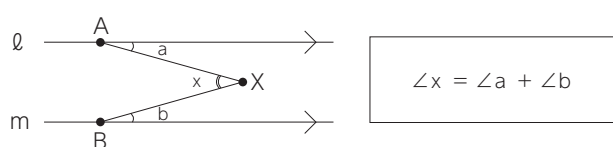
学んだ事柄の条件を変え、問題の持つしぐみに気づかせることも、生徒一人一人が筋道を通して自ら考え、友達と議論し、協働して物語を創り上げるために有効な手段です。(中2「角と平行線」)

平行な2直線 ℓ, m 上にそれぞれ点A、Bをとり、任意の点Xをとり点A、点Bと結びます。この時、 $\angle AXB$ について調べましょう。

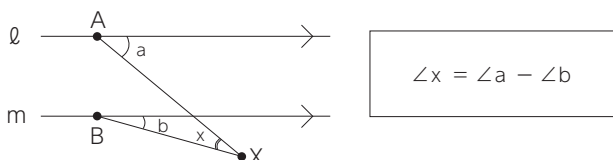
①点Xを直線 ℓ 上にとる



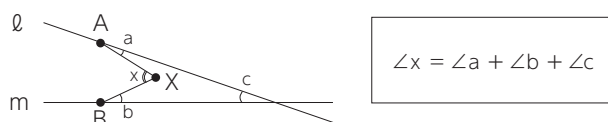
②点Xを直線 ℓ 、直線 m の間にとる



③点Xを直線 ℓ 、直線 m の外側にとる



④直線 ℓ と直線 m が平行でない場面を考える



問題の条件を変えることにより一つの物語として課題を捉えることができ、問題の持つしぐみに気づかせることにつながります。

5 全校授業

最後に全校生徒対象に校長として体育館で行った数学の授業について紹介します。

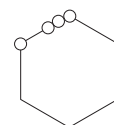
(生徒数 約700名) (中1「文字の式」)

①場面を提示する

正六角形の各辺に同じ数ずつ基石を並べます。基石の総数を求める方法を考えよう。

②課題を設定する

正六角形の各辺に同じ数ずつ基石を並べます。一辺に10個ずつ並べるとき、基石は何個必要ですか。

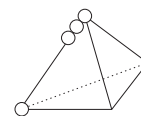


③自力解決 ④比較検討(協働) ⑤一般化

⑥条件がえをする

正六角形を正四面体に(辺の数を変えずに形を変える)

正四面体の各辺に基石をn個ずつ並べるとき基石はいくつ必要ですか。



正六角形を開いた図形に(辺の数を変えずにさらに形を変える)

次の図の各辺に基石をn個ずつ並べるとき基石はいくつ必要ですか。



課題設定や条件がえ等を取り入れ、生徒自らが数学の物語を創り上げる授業は「主体的、対話的で深い学び」の授業そのものです。

授業力を
みがく

理科編

コロナ禍における中学校での観察・実験

～一人1実験のすすめ～

PROFILE

佐々木 弘記 ささき ひろのり (中国学園大学 大学院 子ども学研究科 教授)



1961年、岡山県生まれ。現在、中国学園大学子ども学部子ども学科 学科長 教授。岡山大学教育学部、岡山大学大学院教育学研究科、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程単位取得退学、博士(学校教育学)。岡山県倉敷市公立中学校教諭、岡山県(総合)教育センター指導主事を経て2013年度から現職。学校での研究・研修と教育センター、大学での研究との乖離を痛感。授業改善に役立つ実践研究の追究をライフワークとする。研究分野は理科教育学、教師教育学。編著「J.ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディー教師を教育する人のために」(学文社)ほか。

1 新型コロナウイルス感染症に 対応した学習指導

我が国では、2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、各学校においては、休業あるいは分散登校などの措置が行われてきました。5月下旬には緊急事態宣言が解除され、6月の本稿執筆時点では、感染症に対策を講じつつ、学校が再開されています。

休業中には、生徒は家庭での学習を余儀なくされましたが、各学校では学習課題の送付やオンライン授業の実施など様々な工夫をしています。また、家庭での学習を支援するために文部科学省をはじめ、自治体、教科書会社等からも、学習コンテンツの提供がなされています。授業が再開されたとはいえ、対面での授業が制約される中で、理科の授業において一番気になるのが観察実験です。オンライン授業や学習コンテンツの視聴、教師による示範実験だけでは、生徒による実際の観察実験を代替することは難しいと考えます。

2 学習活動の重点化

2020年6月5日に文部科学省から出された「学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について(通知)」によると、学習活動の重点化に係る考え方として、中学校第3学年の理科について次のように述べられています。

○観察、実験などに関する基本的な技能の習得、また、観察、実験などを通じて自然の事物・現象について理解を図ることは、学校の授業以外の場では困難と考えられること、さらに、安全性の観点から学校の授業以外の場での実施が困難な活動が多いことから、問題を見だし見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈するといった科学的に探究する学習活動は、学校の授業で取り扱うことが望ましい。

先に指摘したように、理科の授業における、観察実験の重要性が改めて確認されました。

文部科学省の学校再開ガイドラインによると、技術・家庭科における調理実習や保健体育科における身体接触を伴う活動については、年間指導計画の中で指導の順序を変更するなどして、当分の間控えるこ

ととされています。一方、教材、教具、情報機器などを使用する場合は、それらを消毒するとともに、使用した生徒は触る前後で手洗い・除菌行為を徹底することとされています。したがって、理科の授業における観察実験については、観察実験に用いる器具の消毒を行い、生徒も除菌行為を行えば、実施することができそうです。しかしながら、理科の授業では、1グループ4～5人で観察実験を行うことが多く、観察実験が始まると、生徒は熱中し、互いの距離は近くなりがちです。さらに、消毒をしているとはいえ、同じ器具を複数の生徒が触りながら観察実験を進めるのが気になります。そこで、生徒一人が一つの観察実験を行う「一人1実験」を提案したいと思います。実際、筆者が大学で担当している理科の内容や指導法に関する授業においても「一人1実験」に取り組んでいます。

3 一人1実験

「一人1実験」については、特に目新しいものではなく、過去においても「個に応じた指導」の充実の一環として繰り返し提言されてきました。生徒が一人で観察実験が行えるように教材や器具等を準備することになります。1クラスの生徒40人分の器具が必要となり、「そんな予算も準備する時間もない」との声が聞こえてきそうです。私の大学の授業では、例年20～30人の履修者があるので、4～5人を1グループとして、6グループで観察実験ができるように器具を揃えていました。すなわち、一種類の観察実験につき、教師用も含めて7セットの器具を準備しています。それを履修者全員分準備するとなると、追加で多くの購入が必要となりますが、そんな予算はありません。そこで、別の三種類の観察実験器具を準備し、合わせて四種類の観察実験を同時並行で進めることにしました。四種類×7セットの器具を準備し、最大28人全員が「一人1実験」できるようにしました。中学校の場合だと、1クラス9

グループで、一種類の観察実験器具は10セットあると思いますので、筆者と同様に、四種類の観察実験器具を用意すれば生徒40人が全員「一人1実験」できるのではないのでしょうか。なお、複数の理科教室がある中学校では、各教室に電流計等の器具を備えている場合が多く、教室間で融通すれば比較的容易に器具を準備できると思います。



「一人1実験」セット

例えば一つの単元での四種類の観察実験を行う場合には、観察実験には順序性があるため、単元の最初の授業で、実施する観察実験の単元での位置づけを生徒に説明し、順序を変えることを伝えておく必要があります。一方、四種類が別々の単元の観察実験の場合は、年間指導計画を変更するとともに、観察実験の手順を示したワークシートを準備したり、他の理科教師とのチームティーチングで指導したりすることも考えられます。その際、特に重要なのが、安全指導です。「一人1実験」のため、教師の目が届きにくくなることは否めません。危険度の低い観察実験のみを選択しておき、授業のはじめにこれから行う観察実験での危険への対応を十分に指導しておく必要があります。また、欠かせないのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現です。マスクやフェイスシールド等の対策をした上で、同じ種類の観察実験をしている生徒同士が集まり、話し合う時間を設けることが大切です。

授業力を
みがく

英語編

会話は続くよ!どこまでも

～Small Talkの大きな魅力～

PROFILE

竹崎 優子 たけざき ゆうこ (高知市立義務教育学校土佐山学舎・校長)

1958年、高知市生まれ。高知女子大学英文学科卒業、高知市立中学校英語教員として採用され、高知市教育委員会、高知県教育委員会で指導主事、児童自立支援施設に併設された中学校勤務、高知県立高校勤務、2015年に開校した現任校で校長となる。1998年に告示された中学校学習指導要領の解説外国語編作成協力者及び教育課程実施状況調査外国語作成協力者、前高知県土佐教育研究会外国語・外国語活動部会会長。



1 How are you? Time (Small Talk)

高学年の新教材で設定されている活動の一つにSmall Talkがあります。小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックには、2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとめた話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることと書かれています。本校では、1時間の授業の流れの最初に、How are you? Timeとして位置づけ、5年生は教師とALTがその日の日直の児童に簡単な質問をし、それを全体へ広げていく活動にしています。そして6年生では、同じく日直の児童と教師やALTが自分の好きな食べ物やスポーツ、その理由など児童が興味がある身近な話題についてやりとりをするのを一つのモデルとして、ペア活動で全体に広げるようにしています。

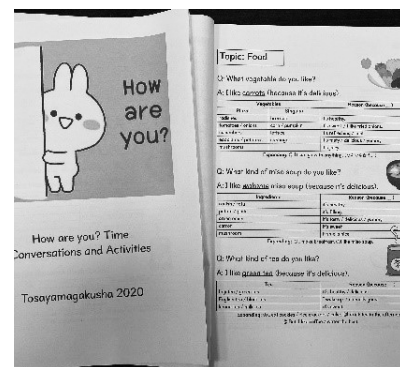
How are you? Timeは授業のなかではもちろん、本校で取り組んでいるEnglish Timeのなかでもやっています。English Timeというのは、朝の会のなかで、5分間、担任といっしょに英語を使って歌を歌ったり踊ったり、簡単な会話をする時間のことです。昨年度末に、学級担任がALT

がいなくてもHow are you? Timeができるように、Conversation and Activitiesという冊子を作りました。この冊子はALTが作ったもので、Food、Sports、Animals、Tosayamaの4つのトピックからできており、それぞれのトピックでどんなQ-Aができるのか、そのやりとりに必要な語彙や、質問の答えを言うときに考えられる理由などが載せられています。

Tosayamaのトピックを例に挙げてみると、Q: What do you want for the Tosayama café?

A: I want yuzu tea (because I like tea. Yuzu smells good).

yuzu teaに代わるMenu Itemsとしては、strawberry jam/ Todo bread / rusks / yuzu jelly/ ginger aleなどが載せられており、Reasonとしては、it's delicious/tasty/yummyなどが挙げられています。



2 自然な対話の進め方

本校ではペアでの対話をするときに、唐突に会話が始まったり終わったりしないように、また突然質問をぶつけたりしないように、対話の流れを大事にしています。

【会話の始め方】

Hello, ____ . (名前が分かっていたら呼び掛ける。)

How are you today? I'm / My name is ○○.

Please call me △△. It's my nickname / first name.

Nice to meet you! / Nice to see you again.

【会話の始まりに】相手の何かをほめる。

Nice hair cut! I like your ○○. Is that a new bag?

Your ○○ is nice / good. Thank you for coming.

【会話を切り出すときに】

I have a question. (聞きたいことがあるとき) → OK!

Let's talk about ◇◇. (話したいことがあるとき) → Sure!

【会話の終わり方】

Well, nice talking to you. Take care. See you next time. Goodbye. Have a good day.

このように、お互いが対話をするときに、相手が嬉しくなったり、話したくなるような表現・気持ちよく対話を終わられる表現などを、一つのパターンとして教えておくことで、どのような内容であっても、まとまりのある自然な対話になります。



3 対話をつなぎ広げるLCCQ、QCA

小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックには、「話すこと」によるコミュニケーションを行う際に欠かせない「対話をつなげるための基本的な表現」が例示されています。本校では、対話の続け方をLCCQ、QCAと表記して意識して使えるように黒板に掲示しています。

LCCQのLはListenのことで「聞いていますよ!」と伝える表現です。たとえば、Wow. O.K. Cool. Uh-huh. Right. I see. Really?など、相手の言うことをだまって聞くのではなく、あいづちをうつ

ときに使います。CはCheckのことで、「分かりましたよ!」と伝える表現

で、相手の言った

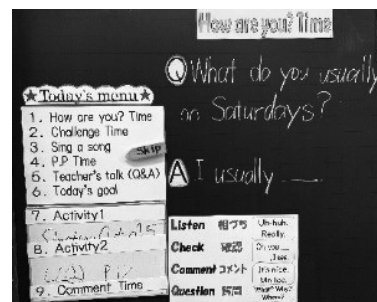
ことを繰り返します。たとえば、Oh, you like/have/want ○○.のような言い方です。もう一つのCはCommentのことで、聞いたことに対するコメントを伝えるときに使います。たとえば、Oh, it's nice / great / excellent / wonderful / amazing !! Me, too. Sounds nice. Looks nice.などになります。最後にQはQuestionを意味し、聞いたことに関連して、さらに知りたいことを質問します。動物が好きと言われたら、What animal do you like?と聞き返したり、ゲームをしたと言われたら、Did you enjoy it?と感想を聞くなど、対話を広げていくことができます。

次にQCAです。QはQuestionのことです。質問が聞き取れなかったり意味がよく分からなければ、Pardon? や Could you say that again?と言って聞き返します。CはCheckのことで、Sushi? What sushi? What kind of sushi do I like?などと言って、あなたの聞いたことはこれです!と確認します。最後のAはAnswerです。理由を添えたり、付け足しをして答えたりすると、対話が広がります。先ほどの質問に対しては、I like salmon because it's tasty. I like salmon and avocado.となります。

本校では、今後もこのような言語活動を継続して行い、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育成していきたいと考えています。

引用・参考文献

・小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(文部科学省)





クラウド前提の学校

PROFILE

井上 勝 いのうえ まさる (元 八千代松陰中学校・高等学校 副校長)



1958年、大阪府生まれ。筑波大学卒業後、八千代松陰中学校・高等学校に数学科教諭として奉職。2003年度からは情報科を担当。教育情報部主任、教務部長、教頭、副校長を歴任。それぞれの立場で一貫して校務の情報化、教育の情報化、校内ネットワークの構築、インフラ整備に携わる。2016年からGoogle for Educationの運用を統括。定年退職後は同校に引き続き勤務。2020年4月よりイーディーエル株式会社アドバイザーボード。

1 1人1台情報端末

2011年に文部科学省が公表した「教育の情報化ビジョン」では、2020年を目標に全国の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校ですべての子どもたちが情報端末を用いて授業を受けられるようにすることが記されていました。以来「1人1台の情報端末」実現に向けての様々な動きがありましたが、昨年大きく前進しました。

昨年6月に文部科学省は「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」を公表し、そのなかで「もはや学校のICT環境は、その導入が学習に効果的であるかどうかを議論する段階ではなく、鉛筆やノート等の文房具と同様に教育現場において不可欠なものとなっている」と述べ、なかなか進まない児童生徒1人1台の学習用コンピュータなどについていくつかの指針や方策を示しました。また、同時に経済産業省が公表した「未来の教室ビジョン」では、子どもたちが1人1台のパソコンを「新しい文房具」として常使用し、高速大容量通信環境でのインターネット接続やクラウド上の作業が可能になるよう学校ICT環境の

貧弱さを解消することが急務であると述べられていました。そして年末に閣議決定された令和元年度補正予算案において、児童生徒向けの1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するための経費が盛り込まれ、GIGAスクール構想実現推進本部が設置されました。

年が明け、GIGAスクール構想実現に向けての動きが本格的になってきたさなか、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休校措置がとられ、学校現場は「学びを止めない」ためオンライン授業を展開することになりました。政府は新型コロナウイルスへの対応としてまとめた緊急経済対策に、「GIGAスクール構想」の前倒し実施等の施策を盛り込み「1人1台端末」や在宅オンライン学習に必要な通信環境の整備等を加速する予算措置をとることにしました。

2 クラウド・バイ・デフォルト

クラウド活用による主なメリットとして

- ・様々な教育用コンテンツの柔軟な利用
- ・自前サーバが不要なため、その維持管理等に関する

るコストを削減

・専門的な事業者が運営するセキュアな環境下におけるデータ管理

・十分な帯域を確保した通信ネットワークと接続することで、動画などの大容量のデータの活用が円滑化などが挙げられます。



クラウド(クラウド・コンピューティング)とは、今、手元で使っているデバイス(パソコンやスマートフォン)からインターネットを経由して全く別の場所にあるコンピュータに入っているソフトウェアやデータを利用するスタイルのこと。クラウドという言葉はエリック・シュミット氏(Google 元CEO)の発言を機に普及したといわれている。

GoogleやMicrosoftから教育機関向けに無償でクラウドサービスが提供されており、埼玉県、神奈川県、奈良県、東京都、広島県などではすでに自治体単位での取り組みが始まっています。

本校では2016年からGoogleのクラウドサービスを利用していますが、参考としてG Suite for Educationを導入する際の手順を以下に略記します。

- ・ドメインの取得、決定
- ・申し込み(Web)
- ・ドメイン所有権の確認
- ・組織設計
- ・管理者の選定および権限の検討
- ・管理項目の検討
- ・研修の企画検討
- ・アカウントの命名規則の検討

・アカウント作成者の検討

・ユーザーに対するポリシーの検討

・デバイスに対するポリシーの検討 等

運用後に修正可能な設定とそうでない設定がありますので注意が必要です。

並行してセキュリティポリシーの見直しが必要となってきますが、今までの概念にとらわれず、「クラウドの特性を十分に生かせるようなもの」、「子どもたちの学びを邪魔しないもの」、「現場の教職員に不便を感じさせないもの」という観点を入れ策定することが望まれます。

また、導入・運用にあたっては専門的な知識も必要になってきますので一部をアウトソーシングすることも賢明な選択肢かと思われます。

3 ハイブリッド

休校期間中に急速に進化したオンライン学習。学ぶ意欲が高まるように工夫されたコンテンツにより一部の子どもたちは自分で学ぶことの楽しさを知り、学び方を学びました。また、先生方はテクノロジーを活かした学びの有用性に気づきました。学校は知識や技能を身につける場所から学び方を学ぶ場所へと変化していく必要があります。そのためには「対面とオンラインによるハイブリッド」が必然で、Beforeコロナに戻すことはあってはならないと思います。Society5.0の形成者となる子どもたちが身につけるべき資質・能力の一つがデジタルリテラシーであることを再認識し、新しい時代の学びの実現に取り組んでいきましょう。

引用・参考文献

- ・文部科学省(2019)「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」
- ・経済産業省(2019)「未来の教室ビジョン」(「未来の教室」とEdTech研究会 第2次提言)



個の成長を信じて

～信州に開校したイエナプラン校～

PROFILE

学校法人茂来学園大日向小学校 (校長・桑原昌之)

本校は、2019年4月、長野県南佐久郡佐久穂町大日向に開校した日本初のイエナプランスクールです。長らく地域に愛されてきた旧佐久穂町立佐久東小学校が閉校した跡地を活用させていただき、地域と共に歩む学校です。標高895mにある信州の中山間地にある自然豊かな学び舎では、2020年4月現在、全国各地からの移住組を含め112名の子どもたちが元気に学んでいます。
(公式HP)<https://www.jenaplanschool.ac.jp>



1 イエナプランのコンセプトをもとに

“どんな人も、世界にたった一人しかいない人です。つまり、どの子どももどの大人も一人一人がほかの人や物によっては取り換えることのできない、かけがえのない価値を持っています。”(イエナプラン教育協会)

私たちは「イエナプラン教育20の原則」の冒頭に出てくる一節を大切にし、建学の精神「誰もが、豊かに、そして幸せに生きることのできる世界をつくる」を掲げ、開校2年目を迎えました。

子どもたち一人ひとりが、その子らしく成長するために本校では次の3つのことを大切にしています。

(1)「自立する」

個々の発達や個性に合わせた学びを大切に、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、学びに対する当事者意識を育みます。

(2)「共に生きる」

異年齢での活動を重視し、子どもたちは、私たち人間は多様な存在であること、そして多様な人たちが共に生きるにはどうしたら良いのか(他者との協働)を毎日の学

校生活の中で学びます。また、地域社会の多様な大人との関わりを持ち、伝統と文化に触れ、挑戦していくことの大切さを実感するとともに、佐久穂町の自然を最大限に活かし、生命の有限性や自然の大切さを知り、自然や地球との共存についても学びます。



ブルーンの栽培を通して本物から学ぶ

(3)「世界に目を向ける」

「対話・遊び・仕事(学習)・催し」といった、日々の暮らしの中で行われている営みを学校の中にも自然な形で取り入れて、理想の共同体を学校の中につくることを目指します。子どもたちは、現実にある本物に触れることを通して、私たちは社会の一員であるということを実感し、世界で

起きていることに責任を持って関わるようになります。

2 特徴的な活動

(1) 異学年による学習活動

学年ごとのクラスではなく、1年生から3年生で構成される下学年、4年生から6年生で構成される上学年がファミリーグループの教室で一日を過ごします。

異年齢で共に学ぶことにより、教えたり教えられたりの関係ができるだけでなく、小さな社会を学ぶこともできるようになります。

(2) サークル対話

対話することは私たちが共に生きていくための土台ととらえ、本校の一日は、サークル対話で始まり、週末にあったことやクラスの中の出来事など、お互いに顔が見えるようにサークル(輪)になって話します。1日の終わりのサークルになって、その日を振り返ります。

(3) 遊び

「遊び」の時間も大切にされています。好きなことを自由にするという遊びもあれば、グループリーダーが意図を持って計画的に行う遊びもあります。身体を動かしてリフレッシュしたり、絵を描いたり歌を歌ったりすることで、リズムカルに一日を過ごします。



教室はリビングルームと位置づけられている

(4) ブロックアワー(自立学習)

グループリーダー(教師)と共に子どもたちは1週間を基本単位として各教科の基礎的・基本的な学習や、

ワールドオリエンテーションに必要な内容についての課題を設定します。「しなければならぬ課題」と「自分が選択した内容」について、どのように学ぶかを計画し、それぞれに合った方法で自立的に学習します。

(5) ワールドオリエンテーション(協働学習)

「イエナプランのハート」と呼ばれ、日々の学習の中心的な活動です。学校全体で取り組むテーマに沿って、教科横断的に学習を進めます。実際に世界で起きていること(身近なことから地球規模のことまで)について、教科学習で学んだことを活用し、グループのメンバーと協力しながら総合的に学びます。

(6) 催しと行事

1年や1週間といった区切りの始まりと終わりなど、様々な機会に学んだことや、嬉しいこと、悲しいことを共に分かち合う「催し」を行っています。

3 豊かな自然、地域と共に歩む

信州の山々に囲まれた本校では、地域の環境を生かした学習活動も盛んです。

佐久穂町の特産品であるブルーノの栽培活動にも取り組み、大日向小学校のブルーノとして町の直売所等で販売したり、学校の南にそびえる佐久地方の名峰茂来山の周辺の森林をフィールドに「環境と地形」をテーマとして学んだりしています。

風光明媚な佐久穂町大日向での学びに興味があれば、ぜひご連絡ください。



豊かな自然環境で地域の方と共に学ぶ

環境首都北九州市のSDGs モデルタウン門司区を目指して



～故郷を愛する気持ち、身近なSDGs活動から始めよう～

PROFILE

熊沢 真嗣 くまざわ しんじ (門司港 かふえギャラリー源氏屋 代表)



1975年、福岡県北九州市生まれ。国立北九州工業高等専門学校化学工学科卒業、北九州市立大学法学部法律学科卒。環境触媒研究所勤務。自営業にて、学習塾(15年間)、飲食店、自動車とバイクのカスタムショップ。産業用電機品機械品取扱商社勤務。中国国立遼寧工業大学外国語学院にて日本語科教員(3年間)。2017年1月より自営業にて「門司港 かふえギャラリー源氏屋」現在に至る。2020年2月「港町SDGsグループ協会」設立。

1 北九州市(故郷)とSDGsと私について

私が営む門司港かふえギャラリー源氏屋は、着物生地のリメイクなど手作りの作品を販売しています。また、手作り教室を実施して日本の伝統的な文化や技術や物を大切に作る心などを継承していこうと取り組んでいます。

そんな私は2018年11月にSDGsと出会い、とても共感を覚えました。そしてSDGsについて勉強を始め、北九州SDGsクラブに入会しました。

2019年1月11日より門司港初の「SDGs推進店」を掲げ、源氏屋SDGs活動を開始、現在も継続しています。



我が故郷、北九州市は2018年4月にOECD(経済協力開発機構)より「SDGs推進に向けた世界のモデル都市」(アジア地域で初・世界の9都市・地域)に選定されました。また、市民団体である北九州ESD協議会は2006年から活動しています。さらに、北九州市は「世界の環境首都」を目指して「北九州市環境

首都検定」を実施しています。私は北九州市が世界から注目されている、SDGsは北九州市にとって素晴らしいチャンスだと考え、故郷を愛する気持ちからSDGsに取り組んでいます。

2 私の身近なSDGsの取り組み

源氏屋の取り組みはSDGs3、4、8、11、12に該当します。

<SDGs12>源氏屋の商品は着物生地を再利用した手作り作品なので環境負荷がありません。物を大切にするという日本の精神は、着物リメイクという文化や技術に継承されます。

<SDGs3、SDGs8>源氏屋は委託販売の店です。作品の作家は一般の60代～90代が中心で高齢者の生きがいにもなっています。源氏屋は作家さんとの信頼関係で成り立っています。

<SDGs3、SDGs11>デイクアサービスと連携してお散歩コースに源氏屋を加えていただき、高齢者の方々に楽しんでいただいています。

<SDGs11>源氏屋はカフェを併設して地域交流の

場、世代を超えた交流の場を提供しています。コーヒーセットのお菓子は地域のお店の物を添えて、「地産地消」、「他店を紹介して相乗効果」を目指しています。

<SDGs4、ESD>手作り教室を実施して、伝統技術や知識や文化の世代間の継承を目指しています。

<SDGs4、ESD>高齢者向けのiPhoneとPCの教室を実施して、世代によるIT技術や情報の格差をなくしたいと考えています。

<SDGs4、ESD>2019年4月から毎月一回のペースで源氏屋SDGsセミナー「持続可能な社会を目指す勉強会」を源氏屋や市民センターにて開催しています。セミナーのテーマは「SDGsとは何? 身近なことから始めよう」、「フェアトレード、エシカル」、「ESD、ESG」、「日本の戦時中から戦後の話」、「日本の縄文時代の生活や文化の話」を行いました。

<SDGs11>毎週末、「源氏屋SDGs 朝の清掃活動」を行い、地域の方々と一緒にゴミ拾いや草抜きに取り組んでいます。なぜ、私が清掃活動をするのか?それは地域が美しくなることで門司港に訪れる方々の滞在時間が延び、まわりまわって源氏屋にもお客様が来てくれるかもしれない!という目先の利だけを追わない思考がSDGsだと私は考えているからです。そして、商売に限らず、人生をおくらせてもらっている町や人や土地に「ありがとう」という感謝の気持ちが私の清掃活動なのです。

3 課題

最大の課題は、SDGsの認知度が非常に低いことです。学校でESDやSDGsを学ばなかった世代や、英語に慣れていない日本人にとっては、SDGsやESDやESGといった英語や新しい取り組みは、受け入れられるまでには時間がかかると思います。

最近になってSDGsという名前はTVや学校の教科書やSNSなどにより若い世代を中心に知られ始めました。しかし「SDGsとは何?」を理解し実行できるようになる

には、意識的に取り組み、身につけていく必要があると思います。さらに若い世代にSDGsを教える立場の大人(教員な



ど)も手探りでSDGsやESDを学び理解していかねばならない状況にあります。SDGsを他者に教える立場の人間は、「情報リテラシー、ポジショントーク、トレードオフ(一得一失)」などに注意しながら講義していかなければならないと思います。

地球や世界や外国のことも大切ですが、まずは自分のできる身近なSDGs活動をコツコツと地道に継続することが基本だと考えています。

SDGsは2030年までの『世界共通の目標』であり『誰も置き去りにしない』という共通理念があります。私は個々人の「小さな積み重ねと優しい心」が世界中に広がったときに大きな問題の解決に繋がると考えています。

高度経済成長、大量生産・消費・廃棄、グローバリズム、利益最優先の経済活動や政治によって文明は発展しました。そんな中で人間は自然との調和や環境への配慮を怠り現在の状況があります。地球や自然や他者やすべての生物に対する優しさや思いやりの心を取り戻すことがSDGs達成に必要なだと思います。

最後に、この文章を書かせていただいている2020年現在は、新型コロナウイルス世界流行の真っ最中です。今後、日本や世界は、ますますSDGsの理念や目標を念頭に置く必要が出てくると思います。SDGsの達成には、自分や家族や友人や故郷や地域といった「身近なものを愛する気持ち」が必要だと私は思います。



本づくりの現場から

文研出版「シリーズ」のご紹介

児童図書部

初回の編集だよりでは、文研出版の歴史や学校図書館・公共図書館向けのシリーズ図書を紹介しました。この号では、文研出版の発行している児童図書のシリーズを紹介いたします。

えほんのもり 対象：幼児から

新鮮な発見、ズシリとくる感動、思わずめくりたくなる楽しさいっぱい絵本のシリーズです。2018年には、教科と関連した絵本を発刊しました。月のみちかけが楽しく学べる絵本『くいしんぼうのおつきさま』や、繰り返す不思議な模様を教えてくれるタイショウ星人が登場する絵本『タイショウ星人のふしぎな絵』など。理科や算数の授業で、読み聞かせをしてみてください。子どもたちの興味・関心が高まることでしょう。



わくわくえどうわ 対象：小学校低学年から

カラーの挿絵がたっぷりの幼年童話のシリーズです。わくわくドキドキの作品を多数発刊しています。「すば」とぬけたねこの手が、困った人を華麗に助ける『ねこの手かします』は、多くの学校図書館に蔵書されています。内田麟太郎さんの作品では、新たに『大どろぼうジャム・パン』のシリーズを刊行中。



2020年11月頃には、4巻目の新刊を予定しています。ご注目ください。

文研ブックランド 対象：小学校中学年から

子どもたちが読書好きになるようにと願いをこめてお贈りしているシリーズです。『青いあいつがやってきた!?』は、第66回青少年読書感想文全国コンクール課題図書に選定されました。2020年9月に、『ココロ屋』の続編!『ココロ屋 つむぎのなやみ』を刊行します。楽しみにしてください。



文研じゅべにーる 対象：小学校高学年から

子どもたちの喜びや悩みを生き生きと描いた作品をお贈りしているシリーズです。2017年には、ノンフィクション作品の『髪がつなぐ物語』を出版しました。この本では、「ヘッドネーション」という、長く伸ばした自分の髪を散髪して寄付をする活動を紹介しています。この本を通じて、「ヘッドネーション」の活動を知った子どもたちが多くいました。



各シリーズ、ほんの一部の作品を紹介しました。

詳しく知りたい方は、文研出版のホームページをのぞいてみてください。





1人1台時代の決定版！
タブレット活用学習の強い味方！

アダプティブラーニング 個別最適化&先生の 働き方改革を実現するアプリ



未来へひろがる数学1~3



未来へひろがるサイエンス1~3

POINT

01

学習スタイルもこれまで通り！

ICTで生徒一人ひとりに合った問題をレコメンド！

生徒はリブリーで問題を見ながら、ノートとペンで解き、解き終わったら、解説を表示させ、自己採点し、リブリーに記録します。

その学習履歴に基づいて問題のレコメンドを行い、学習効率を高めます。



これまで通り
ノートとペンを使って勉強！

学習履歴に基づいた問題の
レコメンドで学習効率UP！

POINT

02

1日に2時間以上の業務時間を削減した先生も！

先生用管理ツールで、簡単に宿題配信&進捗管理！

先生用管理ツールを使うと、パソコンやスマホから生徒に向けて宿題を簡単に出すことができます。生徒がノートの写真と自己採点の結果を送信すると、データが先生用管理ツールに届きます。



Libry for Teacher (先生用管理ツール)



クラスごとに各問題の正答率が自動で集計されるので、生徒の苦手がわかります。また、提出期限前でも進捗状況がわかるので、宿題への着手を促すこともできます。

生徒がアップロードしたノートの写真は、問題ごとに一覧表示でき、どこでつまづいたのかなど、丁寧な検証が行えます。また、生徒が提出した宿題に対して「スタンプ」を使い、褒めたり再提出を促すなど、離れた場所からでもきめ細かいフィードバックが可能です。

